

コンサルテーション事業報告

事業名 重複障害者コミュニケーション支援

事業代表者 川住 隆一 (人間発達臨床科学講座)

対 象 重複障害児・者、重複障害児・者の家族、重複障害児・者が在籍する学校教師、関係機関職員

目 的 重複障害児・者と周囲の者とのコミュニケーションが成立・展開することを目標として、コミュニケーションの機会と方法の開発を行うことを目的とする。また、このための周囲のあり方について、保護者や教員、施設等の職員とともに探っていく。

主なスタッフ 川住隆一および川住研究室指導学生

東北大学大学院教育学研究科：中村保和・笹原未来・野崎義和・岡野 智

東北大学教育学部：相馬由佳

実施内容

(1) 教育相談として対応している事例（5事例）

5事例は、弱視ろう（盲学校高等部）、脳性まひ（養護学校高等部）、アンジェルマン症候群（養護学校中学部）、レット症候群（障害者通所施設、幼児通所施設）の診断を受けている。各々月に1度位の割合で保護者と共に来談しており、研究室やプレイルーム等で対応している。弱視ろう児に関しては、生活行動やコミュニケーションの内容の拡がり、脳性まひ児とアンジェルマン症候群児は、コミュニケーション手段の拡がりが必要な目標である。レット症候群の2例は、移動行動時の様子から如何に意思を読みとり対応するかが大きな課題である。5事例のうち、3事例について日本特殊教育学会の大会発表や卒業論文において経過の一部を報告した（後掲）。

(2) 仙台市発達相談支援センターとの連携で対応している事例（2事例）

仙台市発達相談支援センターでは、重症心身障害児・者へのコミュニケーション支援事業を行っている。本研究室では、この事業と連携・協力することを通して、在宅重症心身障害者へのコミュニケーション支援を図りたいと考えている。本年は、2事例について、家庭訪問や対象者が通所している施設へ出かけ、センター職員と共にコミュニケーションの手がかりを探り、家族や施設の職員に助言を行っている。本誌では、このうちの一人で、

家族の要請を受けて週に1度の割合で継続的な係わりを行っている事例の経過について、別に笹原が報告する。

(3) 病院に長期入院中の事例（6事例）

われわれはこれまで、国立病院重症心身障害児病棟に入院していて、発信手段に大きな制約はあるものの言葉の理解力が比較的高い成人5名に対し、当事者間相互のコミュニケーション支援を1～2ヶ月に1度の割合で実施してきた。ただし、本年度は3回の実施にとどまった。また、このうちの2名について、パソコン操作による文字でのコミュニケーション支援を再開および開始した。

(4) 学会報告等

笹原未来・川住隆一（2007）Rett 症候群事例における接近行動の展開過程の分析—接近・

回避行動の交替に視点を当てて—。日本特殊教育学会第45回大会発表論文集，812。

中村保和・川住隆一（2007）弱視ろう児における「過去の出来事」に関する会話の特徴—

「過去の出来事」と「現前の出来事」への言及の比較から—。日本特殊教育学会第45回大会発表論文集，572。

川住隆一（2007）東北大学百周年記念祭におけるパネル展示「重複障害者コミュニケーション支援」。

相馬由佳（2008）意思表出に課題を有するアンジェルマン症候群児に対する AAC 手段導入の試み—遊び活動振り返り時間の設定を通して—。東北大学教育学部平成19年度卒業論文。